

技術者育成のモデルケースに

学生40人 橋梁の老朽化対策学ぶ

福井県道路メンテナンス会議講習会



山川会長の講義に耳を傾ける学生たち



ハンマーを用いた打音、ひびわれ調査実習の様子

福井県道路メンテナンス会議は20日、福井工業高等専門学校で、将来、建設技術者を目指す学生を

対象に、橋梁の老朽化対策に関する知識や経験を深めてもらうようと、講習会をおこなった。同校は、

「KOSEN-REIM」と名付けられた文科省の事業で、都市構造物の劣化や技術者人材の不足な

どの課題を解消するため、橋梁メンテナンスのスキルを身に付けてもらうリカレント（学びなおし）教育を産学共同で実施。舞鶴高専（京都府）を主管として、福井、長岡、福島、香川各高専の計5校が全国に先駆け事業採択され、社会基盤メンテナンス教育のモデルケースとして実践される。

この日は同学校の環境都市工学科の5年生約44名が参加。まず座学講義からはじまり、オリエンタルコンサルタンの岡本典之氏が、道路施設老朽化の現状や、ドローンなど新技術を取り入れた定期点検の手法を説明した。続いて、福井県コンクリート診断士会の山川博樹会長が、県内のコンクリート構造物の劣化について講義。アルカリ骨材反応による損傷が生じ、海岸からの飛来塩分や凍結防止剤の影響も大きいため、劣化環境が厳しいことや、中性化試験の手法など根本理由から解説した。最後に同学校の宮川清剛特別助教授が、鋼橋の劣化特性について解説し、自身が橋梁定期点検時に苦労した経験から「メンテナンスを前提とした設計を」と学生たちに投げかけていた。

その後、同校の研修フィールドに移動し、昨年搬入された「中央自動車供用から40年経過した鉄筋コンクリート」などの劣化部材を活用して、非破壊検査機器を用いた現場実習を行った。県コンクリート診断士会が講師役となり、5班に分かれてスタート。打音調査やひび割れ調査、ASRゲルステイン法、ドリル法による中性化深さの測定、超音波を用いた測定の実演、電磁誘導法・電磁レーダー法を用いたコンクリート構造物中の背筋状態、およびかぶりの測定を行い、実践を通して講義内容への理解を深めた。

建設コンサルを目指すという小藤菜々さん（21）は「難しいと感じる部分もあったが、将来に役立つ実践が出来て良かった」と感想を話していた。